筑波大学から羽ばたいて

大学法人化まであと半年！

浦山毅
共立出版編集部
1981年　筑波大学第二学群生物学類卒業

在学中のできごと

在学中のできごとの中で、いまも印象に残っていることがある。いつだったかは忘れてしまったが、大学は休みに入っており、学内の人手はまばらであった。本部前の道をチャリンコで通り過ぎようとしたとき、事務のおじさんが沿道の芝生にスプレー缶で「落書き」していた。おじさんは少しずつ移動しながら、同じ動作を何度も繰り返していた。

何やってんだろう？　そう思って、すでに作業の終わった箇所に近づいてみると、芝生のところどころが緑色に塗られていた。当時、本部前にはまだ造成途中の箇所があり、芝生が根付いていないところが枯れて茶色に変色していた。そこに塗料を吹き付けて、枯れた事実を隠していたのである。よく見ると縁石に塗料がはみ出し、ずいぶんと雑な塗り方だったが、少し離れると、芝生が「生きて」いるように見えた。

そのときは落書きの目的がわからなかったが、あとでお偉いさんが大学を視察される予定であることを知った。お偉いさんはきっと黒塗りの公用車に乗って本部前を通過するのだろう。歩いて視察するのであれば、そんな雑な塗り方ではバレていたはずだからだ。私は、あのときの光景が、大学を卒業してからも、なぜか忘れられないでいる。

大学が変わる

いま大学が大きく変えられようとしている。大学が自主的に変わろうというわけではないから、おそらく大部分の試みは思惑通りにはいかないだろう。勉強嫌いの子に親がむりやり勉強しろと強要しているようなものだから、その子が勉強好きになるとは思えない。

だが、この子がまた手に負えなくて、親が問いただすと「今やる、今やる」と言っ

て常に逃げてしまう。子の自主性に期待していたが、いっこうに改まる様子がない。親の立場からすれば、近所の手前もあるし、子にはできたらノーベル賞も取ってほしいから、子のために仕方なく荒療治を断行せざるをえないといったところだろうか。

2004年4月から、国立大学が国の直接統治を離れて、国が創設する法人（国立大学法人）による運営に転換する。運営費の大部分は依然として税金だが、これまでのような不透明な配分方法ではなく、文部科学大臣が定めた中期目標（あらかじめ各大学から提出させた中期計画をもとに作成。6年ごとに更新）に沿った大学運営がなされるかどうかを「評価」して、それに応じて税金が配分されるようになるという。

自治母体としての教授会は弱体化し、代わって学長を中心とする役員会、教育研究評議会（学問内容を審議）、経営評議会（資金繰りを審議）が運営を指揮する。各会には学外者を含めなければならない。運営がかんばしくない大学は、統廃合される。

法人化の「評価」

国立大学法人化に際しては、国、産業界、大学、学生、国民、それぞれに思惑も理想も反対意見もあるだろう。

国は、技術立国としての国の発展と、無責任な教授会の改善、教職員の非公務員化による大幅な国家予算削減を夢見ているし、産業界は、即戦力となる学生の教育と、研究開発費を大学に肩代わりさせることを夢見ている。

今回の変革で最もあやしい部分は「評価」である。評価という言葉には客観的な響きがあるが、現実には相当に主観的で、恣意的な操作にものすごく弱い。たとえ学外者を入れようと、会議がその場の雰囲気でどちらにも転ぶことがあるのは、誰の目にも明らかだ。

評価はすごくむずかしい。しかも評価のための労力は並大抵ではない。そもそも人が人を評価できるのかといった議論さえ出てくる。そんな評価をあえて取り入れるというのであれば、それが本当に生かせるものでなくてはならない。

大学はよくなるのか

たとえ大学の活性化のためとはいえ、今回の法人化療法は粗すぎる。産業界で成功したアメリカ型の競争原理を、デリケートな学問の世界にそのまま当てはめるのは、無謀としかいえない。

大学の役割には、「教育」「研究」という2本の柱がある。出版界ではこれに「啓蒙」を加える。私はさらに、近年の科学の暴走ぶりに社会が不安を抱いている状況下で科学の本質を「説明」することも大学の役割

だと思っている。

これらのうち、研究には競争原理を取り入れてもいいかもしれないが、その他の、とくに教育にはまったく適さない。教育には本当の意味での「ゆとり」が必要である。効率だけを強調しすぎると、結論がすぐに出せる問題しか解こうとしない、狭量な人材しか育たない。

それに、長年の経験がある私立大学でさえむずかしい「経営」という問題に、とくに学生数が少ない地方の国立大学などがすぐさま解答を用意できるとは思えない。背に腹は代えられないから、大学がまず「食いぶち」の確保に奔走する姿が目に浮かぶ。

大学はどうする

それにしても、大学からの発言が驚くほど少ないのはなぜだろう。たぶん、法人化後に本当にどうなるかわからないというのが正直なところだろうが、いま不用意に発言して後で仕返しされるのが怖いとか、逆に思いっきり儲けてみようと「取らぬ狸」を夢見ている御仁が、発言を控えておられるのかもしれない。

あるいは、いくら国が中央集権的に事を進めようとしても、大学という現場ではしょせん急転回は無理だから、なるようにしかならないといった開き直った気持ちがあるからか。

ひとことで大学といっても、たぶん大学の経営者と現場の教員とでは、感じ方に相当な開きがあるだろう。経営者にとってみれば学生は単なる駒であり、一人でも優秀な駒を集めて平均点を上げることに神経を使うにちがいない。

ところが現場では、学生は生身の人間であり、生かすも殺すも教員次第といった使命感があるはずである。たとえ外への発言がなくても、大学内部では十分に建設的な意見を戦わせつづけ、学生と学問と社会の幸福と発展のためにご尽力いただきたい。

教育にも情熱を

法人化を機会に、大学受験そのものをぜひ考え直してほしい。いまの中学・高校では受験勉強だけを教えており、たとえ人間的に問題のある学生であっても、成績さえよければ教師は何も言わない。親にしてもしかりである。勉強に落ちこぼれた学生は、成績以外には逃げ道が用意されず、それが現在の荒廃した学校や社会を生み出しているような気がしてならない。

受験をやさしくし卒業をむずかしくして、本当に学問を身につけたい人間には徹底して実用的な教育を施してはどうか。いまは勉強に疲れた高校生が、大学に「遊び」にやってくる。これでは、学力が低下するのは当たり前である。

とにかく、受験の労力を軽減させて、中高校生に「考える」訓練を課してほしい。ただ暇を与えることが、ゆとりなのではない。そして、子を評価するのに、試験の成績だけでなく、手先の器用さ、人の暖かさ・優しさ、社会奉仕度など、さまざまな尺度を用意してほしい。

私は、いまの教育なら小学・中学・高校と 12 年も勉強することはないと思っている。簡単な読み書き計算と、生きていくうえでの社会的ルールなどを 10 年ぐらいで教え、本当に勉強したい者だけが大学に進めばよいのではないか。

受け入れ側の大学も、難解な問題をマークシートで答えさせるのではなく、たとえば生物学類だったら、どんな昆虫が好きですか、進化をどう思いますかといった問題を用意して、入学させて鍛えてやりたいと思う学生を、教官みずからが選ぶ努力をする必要があるだろう。

最近思うこと

近ごろの教科書検定の報道記事を読んでいると、首をかしげざるをえないことばかりである。検定では、たとえば「進化」に結びつく内容はすべて削除するという。生物学のおもしろさは進化そのものであり、とくに私が学んだころの空想的進化論とちがって、いまは遺伝子配列に基づく分子進化や地質学の進歩など、学問的進化論に向けての動きが活発な時代である。

そんな時に、中高校生に進化を教えてはならないとは何事だろうか。イオンもダメ、コドン表もダメ、電子軌道、DNA 修復、ATP 合成、tRNA 立体構造、PCR 法、ES 細胞もダメとは。文部科学省は、本文とは別の箇所に枠で囲むなどすれば分量で 2 割程度はふれてもいいというが、そんな姑息な方法でなく、正々堂々と「本文」で勝負すべきだ。

生物学の分野では「多様性」が重要だと教えられる。多様な価値観は、人が社会で生きていくうえでぜひ必要である。ところが、いま企業が不況から脱することができずにいるのは、儲け一本槍の価値観に原因の一端があるように思う。

これから大学は、いわば企業の仲間入りをする。企業にいて思うのは、会社が変わるために真に必要なことは、社員の意識改革である。大学法人化によって、せめて教職員の意識が改革されんことを願うばかりである。

（うらやま　たけし）